

令和2年度(2020)版

第34号

# OB 会 会 報



熊本大学体育会サッカー部

## 熊大サッカー部 回顧録5 (1988～89年)

本田五郎 (1986年入学：現東京女子医科大学 准教授)

前回まで則元先生が記されたように、則元先生が着任された後の8年間、熊大サッカー部は九州のトップチームそして全国大会出場という頂に向かって一步一步坂道を登り続けました。では、その後はどうなったのか？

その後の2年間(1988～89年)を、則元先生からご指名頂いた私本田(全国大会時は2年生)が振り返ってみたいと思います。なお、部員の皆さんのお名前は敬称略でお許し下さい。

### 1. 1988年の始動；ミッションは“脱則さん”

全国大会出場の翌年(1988年)のチームは主将に高橋誉、副主将に高橋哲也という体制で始動しました。当時、幹部(最上学年の部員)は毎週末に黒髪の生協食堂に集合して、翌週の練習メニューを決める幹部会議を開催していました。始動時には1年間の目標を設定し、年間計画を立てました。私は一つ下の学年から主務という肩書き(ほぼ記録係)で幹部会議に出席することになりましたが、初めて参加した日に突然聞かされました。「則さんが監督辞めるって言いよんなハル」「はあ、なんで?」「全国に1回行ったケンて、もう飽きなはったとだろか」・・・そんな会話だったような気がします。則元先生は、前回の回顧録でも述べられていたように、ご自身の経験も踏まえて熊大サッカー部の次のステップは学生による自立運営であると考えておられました。しかし、主務の私から見た印象では、この年の幹部にとって、前年の全国大会出場という金字塔にプレッシャーを感じる中でのやや不安な船出でした。

1988年の九州エリアの全国大会出場枠は、夏の総理大臣杯が1枠で、秋の大学選手権(九州学生リーグ)が2枠でしたので、秋のリーグに向けてチームを仕上げていく方針で計画がまとめられました。春先までは、フィジカルの強化とともに、ポゼッションサッカーのための1タッチ・2タッチの早いタイミングでのスペースを使ったパス回し、番号のついた標準攻撃パターンの理解と認識の共有、ワンサイドカットによる連携守備など、基本スキルの練習に重点が置かれました。そして、練習試合にはマンツーマンDFで臨み、局面での1対1の強化を図りました。

新学期に入ったところ、総理大臣杯に向けてトップチームのフォーメーションが組まれました。攻撃は1トップ(石丸)に2枚のトップ下(高橋誉ら)、その後ろにゲームメ

ーカー（安永）という石丸、安永の個性を活かしやすい 1-2-1、守備は前年と同様、ゾーンプレスのために 2 枚のディフェンシブハーフ（熊大名；底）にフラット 4 のゾーン DF というフォーメーションを採用しました。ただし、前年と同様、福大戦だけは、能力の高い 2 トップに 3 バックで対応し、ディフェンシブハーフが両サイドのアタッカーをマークするシーンが多くなる、マンツーマンに近い受け身のフォーメーションでした。

## 2. 1988 年の戦績；つかみかけた全国大会への切符

以下、高橋哲也さんの記録と記憶をお借りしてまとめました。哲也さん、変わらず几帳面です。この年の総理大臣杯九州予選（鹿児島溶岩グラウンド）は準決勝で鹿屋体育大に 0-1 で敗れ、3 位でした。創設以来年々レベルアップし台頭しつつあった鹿屋体育大に、前年の九州リーグに続く公式戦 2 連敗でした。



1988 年 6 月 総理大臣杯九州予選（鹿児島溶岩グラウンド）

秋の九州学生リーグでは、第 2 戦で鹿児島大と 1-1 で引き分けましたが、その他の B クラス（国経大、佐賀大、福教大）を順当におさえて前半を折り返しました。そして第 5 戦では、2 連敗中の鹿屋体育大に 2-1 の逆転勝利を収め、いよいよ次の第 6 戦で九産大に勝てば全国大会出場（2 位以内）が確定するという状況でした。でも、そこに落とし穴がありました。九産大が、前年に熊大に敗れて以来低調だったこともあり、チーム内には九産大を侮る雰囲気蔓延していました。難敵鹿屋体育大に勝利して浮かれていた部分もあり、則元先生の厳しい警告の言葉も皆には届きませんでした。

勝てるはずだった九産大戦は、押し気味に進めながらも前半に納得のいかない判定でのPKで先制され、時間が経つにつれて悪いムードのスパイラルにはまり、終わってみると1-3での敗戦。意気消沈したまま翌日の福大戦に臨み、同じ1-3でも完敗に近い内容で全国大会出場の可能性は消失しました。「あの時の平和台競技場の秋空の晴天がとても虚しかった・・・」(高橋哲也さん)

最後に4年生中心のチームで出場した九州インカレ(熊本)は、準決勝で福大に0-1で敗れて3位でした。2度目の全国大会出場を目指して順調にハードルをクリアしてきたけれど、最後の失敗が悔やんでも悔やみきれない、そんな1年でした。

### 3. 1989年の始動；谷間の年に加速した“脱則さん”

翌年は主将に安永、副主将に本田、亀子という体制でスタートしました。この年は、幹部学年の人数が少なく、前年にトップチームの試合に出場していたのが安永、本田、亀子の3名のみであったこともあり、全国大会出場はおろか九州リーグ残留さえ危ぶまれる、いわゆる“谷間の年”でした。

主将の安永は、抜群のキープ力とアウトサイドキックの絶妙なスルーパスが当時の九州学生リーグでは際立っており、チーム内ではカリスマ的存在でしたが、その一方で遅刻、さぼりの常習者でした(注：公平性を保つために本人の言い訳も聞いてあげてください)。そのため、チーム運営の実務は副主将の私が仕切ることになり、私が教育学部生ではなかったこともあって、前年から「学生に任せる」姿勢を打ち出しておられた則元先生とサッカー部との距離はさらに遠くなりました。

といっても、チーム運営自体は前年までのやり方、つまり則元式をほぼ踏襲してやっていました。私は主務として参加していた前年の幹部会議の議事録に「自分が幹部ならこうする」と思ったことを細かく考察して追記していました。意図したわけではなかったのですが、1年間、則元式チーム運営の予行演習をして綿密に準備を整えていたわけです。このことが、本格的な“脱則さん”の布石になったのは間違いないと思います。

この年、全国大会への切符は夏の総理大臣杯が2枠、秋の大学選手権(九州学生リーグ)が1枠でした。トップチームのメンバーが大幅に入れ替わる谷間の年であったことも相まって、年間計画を立てにくかったのですが、ここは思い切って秋の九州学生リーグ優勝を最終目標にしました。この無謀な目標を達成するには九産大・鹿屋体育大だけでなく福大にも勝たなければならず、ほとんどの部員にとって“絵に描いた餅”でした。たぶん憶えている人はほとんどいないだろうと思います。

フォーメーションは福大も含めたすべてのチームに対して2枚底、フラット4で臨む

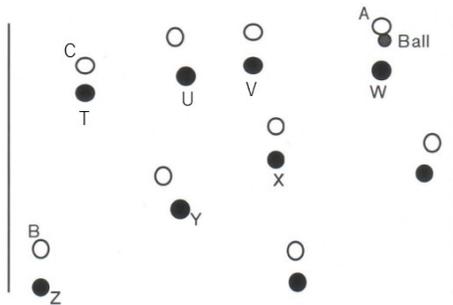
方針としました。個々のフィジカル面で対抗しきれない分を頭脳的プレーでカバーするために最適化されたゾーンプレスをこれまで以上に磨き上げる。谷間のチームにとって、それ以外に“絵に描いた餅”を食すための活路はないと考えました。

#### 4. ゾーンプレスとゾーン DF

ここで、私たちが“積極的ディフェンス”と呼んで実践していたゾーンプレスのことを書かせて頂きます。当時、世界レベルでも“自陣に下がってマンツーマン”という感じの受け身の守備が主流で、お手本となるような試合を見る機会はありませんでした。ただ、元オランダ代表監督のリヌス・ミケルスが書いた「プレッシング・フットボールの秘密」というタイトルの短い日本語訳の論文（サッカーマガジンの記事）があり、則元先生に頂いたコピーを初めて読んだ時、目からうろこが何枚も剥がれ落ちたことを憶えています。しかし、チーム全員にこれを読ませても、能力や経験によって理解度はまちまちです。もちろん戦術の理解だけでなく個々の選手の身体的スキルの向上も必要ですが、とにかく、谷間の年のチームでゾーンプレスを高いレベルに持っていくためには、要点を分かり易い言葉にして繰り返し皆に説明する必要がありました。

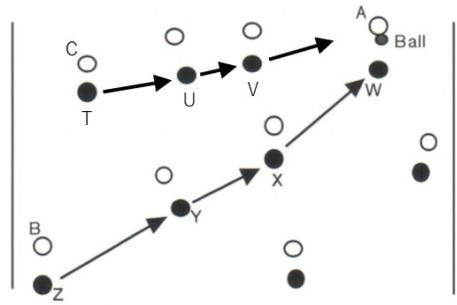
ゾーンプレスを行うためには常に先手を打つことが重要です。ディフェンダーは味方の攻撃中も観戦者にならずに、細かい指示を出して全フィールドプレイヤーをバランスよく各ゾーンに配置しておく必要があります。そうすることによって、ボールを奪われた瞬間から、その周囲にはマンマークが整い、フリーでパスを受けられる相手がいない状況を作ることができます。ボール保持者がパスを躊躇したところにすかさずワンサイドカットを駆使して、後ろから順にマークをずらして人を集中させます（当時のサイン名つもれ）。ボールから最も遠いところにいる相手選手はノーマークになりますが、苦し紛れの大きな縦パスにはオフサイドトラップ（当時のサイン名えがわ）で対処します。この動きを全員が理解して素早く連動することで、高い位置で再びボールを奪い返して攻撃を再開することができます。これにはコート内での極めて強力なリーダーシップとコーチングが不可欠です。

① DFリーダーは、攻撃中も常に、味方をバランスよく配置して、準備しておき、ボールを奪われた瞬間にマンツーマンの配置を整える。



Wが寄せていれば、AからBやCに直接のパスは難しい。

② 次に、ワンサイドカットを使って相手のパスコースを限定しつつ、後方からマークをずらして局所に人を集中させることで、数的優位な状況を作る。



T、U、VとZ、Y、Xはそれぞれ連動してほぼ同時に動く。

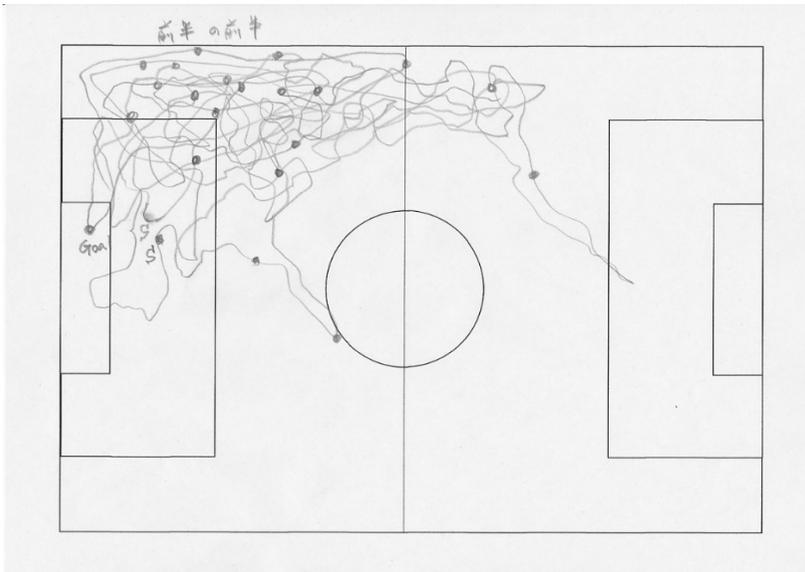
サッカー部の卒論；幹部の手引き（1990年、本田著）より（一部改変）

また、相手に攻め込まれた際には、ゾーンDFで巧く守ると個々のフィジカル面で対抗しきれない分をカバーすることができます。

マンマークの対象を受け渡してマークするだけでなく、人につられてディフェンダーが移動してしまうことで相手に有効なスペースを与えることを防ぐのもゾーンDFの目的の一つです。しかし、各自が担当ゾーンを守ってスペースを消すだけでは守りにはなりません。ボールを持った相手には常にマンツーマンとカバーリングの対応ができていなければ、シュートを打たれます。つまり、各自がスペースの消去とマンツーマンの動きを臨機応変に切り替えることでゾーンDFは成立しますが、局面ごとにディフェンダー間での細かい取り決めを作ってコンビネーションを成熟させることも必要です。

そこで、相手のフォーメーションや攻撃のパターンを試合前にあらかじめ分析して把握しておく、とても効果的です。相手チームの戦前分析は、則元先生の指導のもと、おそらく私が入部する以前から実践されていました。特に九州学生リーグに際しては、対戦相手の試合をトップチームに入っていない部員が15人程度のグループで事前に偵察してデータを取りました。ビデオ撮影だけではありません。10名のフィールド選手について、それぞれの選手ごとに、サッカーコートが描かれたA4用紙の上に、移動した軌跡を鉛筆で記録します。ボールをタッチしたりドリブルをしたら記号で示します。パ

スやシュートをした場合も記号をいれます。前後半をそれぞれ半分に分けて一人の選手につき合計4枚がデータとして収集されます。撮影されたビデオとともにこの記録を見ると、フォーメーションと攻撃パターンが良くわかります。分析結果をもとに、データ収集部隊の部員が対戦相手の仮想チームを作り、試合前の1週間、グラウンド上で毎日シミュレーションをしました。「この選手がこう動いたら誰から誰にどこでマークを受け渡す」という感じです。アナログですが、いわゆるIDサッカーでした。



右サイドのアタッカーの軌跡（前半の前半）

## 5. 1989年の戦績；ついに福大に勝利

この年の総理大臣杯九州予選（熊本）は準決勝で福大に敗れて3位でした。そして、九州学生リーグは、序盤こそ良かったものの、リーグ中盤で沖縄国際大と鹿屋体育大に連敗。全国大会どころの話ではなくなり、最終節を待たずしていよいよチーム崩壊かという危機的状況に直面しました。しかし、終盤に誰も予想しなかったことが起きました。それまでの福大は、九州学生リーグ創設以来4年間一度の引き分けさえも無い、まさしく常勝チームでした。ところがなんと、第6戦（福大G）でその福大に2-1の逆転勝ちを取めたのです。その勢いのまま翌日の最終戦（平和台競技場）では九産大に3-1で圧勝し、九州リーグを3位で終わりました。

福大戦では前半に1点を取られたのですが、山口、斎藤、亀子らが前線から相手を追い回し、いずれもボールを奪って速攻からの2得点でした。アディショナルタイムが

10分以上引き延ばされましたが、ものともせず最後まで攻撃し続けたことを憶えています。コート内での強力なリーダシップとコーチングも“脱則さん”効果によってさらに増強されていました。まさしく、その後世界中で標準となった高い位置でポゼッションするゾーンプレスサッカーだったと思います。

九産大との最終戦を終えた後の平和台競技場の秋空は、1年前と同じ快晴でした。もしもこのチームで全国大会に出ていれば、もうひと暴れできたかも・・・秋空の下には1年前とは一味違う口惜しさがありました。

#### 6. 熊大サッカーの集大成；九州インカレ

最後に、この年も4年生中心のチームで臨んだ九州インカレ（福岡）を3位で締めくくりました。大会後の打ち上げでは、トップチームでプレーする機会のなかった中川、右寺、加藤、そして吉田（1、2回のみ出場あり）が主役でした。少なくとも私が在籍した4年間、九州インカレは毎年4年生中心のチームで臨み、常にベスト4以上の成績でした。実は、これこそが当時の熊大サッカー部を象徴していたように思います。もちろんトップチームが勝つことは最大の目標でしたが、50人近い所帯の中でトップチームの試合に出場できない部員の役割や motivation について皆で考えるような雰囲気がありました。如何に魅力的で強い組織を作るか・・・大学の運動部は新人から定年退職までを4年間で経験できる模擬的社会組織であり、使える組織人になるための効果的な訓練の場になり得ます。当時、バブル崩壊前とはいえ、熊大サッカー部から多くの部員が一流企業に採用されていました。皆さんきっと戦う組織人としての高い能力を期待されていたのではないかと思います。



1989年12月 九州インカレ終了後

## 7. おわりに；学生の皆さんへ

1988～89年の正確な戦績をお伝えしたかったのですが、大事にとっておいたはずの幹部会議ノートは30年以上たった今ではどこかに消え去りました。そのため、高橋哲也さんからの情報以外は evidence に乏しく、私の思い込みで間違っている部分もあると思います。それでも、「五郎君たちの時代の経験は現役の学生たちのヒントになるので、当時の意気込みなどを書けばいいから・・・」という則元先生のお言葉に甘えて、少しでもお役に立つことを願いつつ、このまま筆を置かせて頂くことにします。

私たちの世代は、ゾーンプレスに先進的に取り組むことができて幸運でしたが、いつの時代でも、いかなる戦術であっても、深い理解と地道な練習、そして緻密な運用によって完成形を目指すことで充実感を味わえることに変わりはないはずです。また、チームスポーツではリーダーシップ、指導力、企画力といった組織力を上げるための能力、そしてその実行力が求められます。これらの姿勢や能力は、実社会の中でも同じように必要とされます。例えば、私は卒業後、外科医として約30年間働いていますが、自分自身の外科医としてのスキルを磨く一方で、組織の中で生き抜き、そして強い組織を育てることが求められることにおいては他の業種と同じです。病院では私たち外科医の手術をサポートする様々な職種（ナース、技師、薬剤師、栄養士、事務員など）の人々がたくさん働いています。修行中の若手外科医とともに、彼らも育てて、彼らの motivation（やりがい）を維持することも重要な仕事です。サッカー部の運営と何となく似ていると思いませんか。

他にも熊大サッカー部での色々な経験が日々の仕事で活かされています。トーナメント戦やリーグ戦を勝ち抜くためには、すべての試合の前に可能な限りの準備（ID サッカーや体調管理、気持ちの集中）を毎回欠かさず繰り返す必要がありました。しかし、連勝すると自分たちを過信して気が緩み、準備を疎かにすることがありました。1988年の九産大戦や1989年の沖縄国際大戦の取りこぼしはその典型例でした。今、私は外科医として手術を毎回成功させなければなりません。手術の腕だけでは失敗をゼロにすることはできません。手術前に緻密なシミュレーションを行ってあらゆる事態を想定して手術に臨むこと、しかも、これを毎回怠らずに繰り返すことが、“失敗しない外科医”の絶対条件です。1度や2度なら運よく勝つ（成功する）こともあるでしょう。でも、毎回、運に委ねる部分を限界まで少なくして本番に臨まなければ、いかに実力があっても連勝することはできません。そういえば、「私、失敗しないので」なんていうテレビドラマもありましたね。

でも失敗が許されないのはプロの世界の話です。熊大サッカー部で、私たちもたくさんの失敗を繰り返し、そして成長しました。学生は失敗してもいいんだと思います。失敗の許される学生スポーツでは、もちろん結果も大事ですが、本気で取り組むこと、そして考えて取り組むことこそが皆さんの将来のために最も大切なのではないかと思います。現役の皆さんが、武夫原を生き生きと駆け回っている姿を想像しながら、皆さんにエールを送りたいと思います。走れ！そして、呑め！